

「繋がりを生きる」

先日法話の依頼を受け、三重県桑名市のある村の集会所にお邪魔しました。そこでは毎年その年の稲の収穫が終わると、地域の方々が集会所に集まり、「虫供養」というお勤めをされていることを伺いました。

私はお茶を出してくださった40代の男性の方に、「この『虫供養』とはどういう意味のお勤めなんですか？」とお尋ねしたところ、「わしもようわからんけど、長老の方からは、『私たちが米を作り生きていくということはいろいろないのちを奪わなければ生きていけない。田を耕せば蛙やミミズを切り刻むし、草が生えたり害虫が付くと稲の成長に影響するので、薬を撒かなければならない。また、草刈機であぜ道を刈れば蛇などの多くのいのちを奪っている。そういう中で稲を収穫し生活させてもらっていることに手を合わすんや』と聞いております」とお話しいただきました。

人間が生きていくには多くのいのちを奪わなければならず、その様々ないのちの繋がりによって生かさせていただいていることを、次代の方々に伝えておられる姿に私は深く感銘いたしました。そこには人間として生きる悲しみがあり、決して人間中心の立場に立って、お米が獲れたことに対する感謝や、虫を慰めるようなお勤めではないのです。

私たちは同じ虫でも、稲を食べてしまうような人間にとって都合の悪い虫を害虫と、また反対に蜂のように蜂蜜を作るような虫は益虫と呼んだり、あるいは同じ犬でもうちの犬は可愛いペット、また反対に外に蔓延る危険な野良犬と、人間の都合によっていのちを選別しています。

本来、賜った生命は平等であるはずなのですが、私たち人間にはこれを平等と受け止めることはできません。しかしながら、この村の方が言われたとおり、私たちが生きて生活するということは様々ないのちを奪わなければ生きてけませんし、また、その繋がりを生かされているという事実があります。

そのことに頭が下がる時、いのちを選別し続ける私たちのあり方、すなわち「わたしのいのち」と私有化し続ける傲慢な姿が問われてくるのではないでしょう。か。